

香川の自然に育てられて MESSAGE

川井郁子
KAWAI Ikuko



プロフィール

ヴァイオリニスト、作曲家。東京芸術大学・大学院卒業。大阪芸術大学(芸術学部)教授。国内外の主要オーケストラをはじめ、ホセ・カレーラスやバレエダンサーのファルフル・ルジマートフなど様々なジャンルのアーティストとの共演、映像音楽の作曲等、多彩な活動を通じて独自の表現世界を追究している。国内外のトップのフィギュアスケーターの演目にも楽曲が数多く採用されている。また、川井郁子Mother Hand基金の設立や国連UNHCR協会国連難民親善アーティストを務める等、社会貢献活動も精力的に取り組んでいる。オリジナルアルバム「レッド・ヴァイオリン」「REBORN」他。2012年には「うどん」だけじゃない香川の魅力を伝える「アート県副知事」に就任。レギュラー番組:テレビ東京系「100年の音楽」毎週金曜日22時54分～23時00分(BSジャパン 毎週木曜日21時54分～22時00分)

ヴァイオリンは6歳から始めました。お手伝いで洗濯物を畳んでいた時、ラジオからヴァイオリン協奏曲が流れて来て、弾いてみたいと思ったのがきっかけです。ヴァイオリンを持った人すら見たことがない田舎に住んでいたため、父も子供の気まぐれだと思っていたようです。でも半年間ねばった甲斐あって、クリスマスの時にサプライズで父がプレゼントしてくれました。

しばらくは、趣味でヴァイオリンを弾いている年配の女性の所に通っていましたが、小学4年の時、ヴァイオリニストの先生に代わりましたが、レッスン場所が丸亀だったので、毎週2時間余りかけて通うことになりました。すごい田舎だったので小学校への道も藪の中を通ったりしていました。途中、蛇とかいろいろな生き物がいて、すごく怖かった思い出があります。ため池もそこら中であって、レッスンに通う道中や祖母の家の近所にもありました。ため池の土手は恰好の遊び場でした。

最初はため池がある意味が分っていなかったのですが、小学生の終わり頃、弘法大師(空海)の映画が公開された際

に母から聞きました。弘法大師がため池の改築までした人だとは知りませんでした。また、香川が他県に比べて水が不足していることを知りショックでした。確かに、水不足になると小学校の先生も給水車にかり出され、みんなで助け合っていた記憶があります。バケツに汲んだ水で生活することも何度か経験しました。

うどんもため池と同じであまりに当たり前だったので、東京に来てうどん文化の違いにびっくりしました。味も食べる回数もぜんぜん違い、香川では麺と言えはうどんなので、年越しも「うどん」です。香川と言うと、100人中の100人が「うどん!」と言い、それ以外のことがまず出て来ません。しかし、素晴らしいアーティストも沢山いらっしゃいます。イサム・ノグチさんが創作の場として住み、庵治石を使った彫刻家の流政之さん、画家の猪熊弦一郎さんや東山魁夷さんも。歌手の方も沢山いらっしゃいます。「うどんだけじゃないよ。アートが生まれる県だよ」ということも知っていただきたいですね。

また、小豆島や直島などの瀬戸内海の島々もいいですね。少し心が疲れた時などは、湖のような穏やかな海を眺めると、とても癒されます。だから演奏で岡山や広島に行った際には、なるべく香川へ帰るようにしています。瀬戸大橋を渡る時、瀬戸内海の風景を見るだけですごく元気が湧いてきます。

ヴァイオリンは歌と違って言葉のない音楽ですので、イメ

ージを限定しないで創り始めます。すると浮かんで来るのは自然が一番多く、なかでも香川の風景である場合が多いです。娘の名前を付けた『花音』と言う曲は、娘を通して、幼少の頃の故郷の景色が頭の中に溢れてできたものです。住んでいた高台から瀬戸内海となだらかな山が連なっているのをぼおーと眺めながら、ちょっと寂しさを抱えた自分とか、叱られて家の中に入れない自分とか、そんな感覚の想いを込めています。

地元での演奏会はステージに立った瞬間、お客さんとの距離がとても近く感じ、すぐに緊張感がほぐれます。合間のトークも共通な話題で話しやすいし、演奏中も香川の思い出が浮かんで来て楽しい。あの頃みんなが行っていた映画館とか、その頃香川で流行っていたものとか、東京と違って商店街を歩いていると必ず知り合いに会うとか。そして、感謝の気持ちが溢れて来て幸せな気持ちになります。理屈で考えているわけではなく、素直に「ただいま」という気持ちです。

故郷を想う時いつも感じますが、景色だけではなくて、やはりそこに住む人の温かさだったり素朴さが一緒になって自然をつくっていると思います。その自然があったから、自由に自分のインスピレーションを表現できるようになったのだらうと思います。人の素朴な温かさが香川の一番の魅力かな。私はそれに育てられましたから。

瀬戸大橋から望む瀬戸内海の島々(写真:塚本敏行)